

はじめに

本書は、院政期に活躍した歌人・歌学者である藤原清輔の著作を中心に、その伝来や書写の過程で起る様々な現象に着目し、またその歌論・歌学における諸問題を視野に入れながら、その文化史的な位置づけを考察するものである。

しかし、清輔が大成した六条藤家歌学知の全域的な把握、あるいは歌人伝や歌壇史の整理といった事柄を期待して読まれる方には、期待外れな、あるいは違和感を覚える構成になっているかもしれない。本書で展開される議論や問題意識は、歴史的な事柄や、歌学書の伝本や来歴といった文献学的な事象を扱っていたとしても、作者の伝記的考証や諸伝本の書誌・系統分類を直接的には扱ってはいない。もちろん、必要な場合には、実証的な考証を心がけたつもりである。ただ、本書が何を問題として、どのような方法でそれを解決しようとしたのかについて説明が必要であろう。

本書が問題とするのは作品や伝本そのものだけではなく、それらの変容が引き起こす諸現象にある。私たちが目にする〈文学作品〉は、本の形を取るにせよ、電子書籍やオーディオブックのようなデジタルデータの形をとるにせよ、ラジオドラマのテープやCDの形をとるにせよ、あるいはまだ見ぬより新しいデバイスによる表現をとるにせよ、読む／聞く、書く／語るという行為抜きには、それらの表現は

生成も受容もされない。生産、流通から享受（あるいは保存や保管）に至るまでの、一連の長大なプロセス無しに、文学は存在しえない。このような作品だけではなくプロセスを重視する観点は、作品の内容の解釈、あるいは作品の物質的な側面（書物）を重視する見方からすれば、いたずらに問題を複雑にするだけの瑣末な議論だと思われるかもしれない。

けれども、こうした書くことと読むことの間にあった媒介要因の諸力、従来（文学）の周辺として捉えられてきた諸要素が、その内容や本の体裁や来歴に大きな影響を与えていることへの配慮抜きには、文学論などとはや不可能であろう。古典文学の世界に限定しても、文庫ごとに整えられた書物の表紙、体裁を整えて書写している定家本の諸本¹⁾、あるいはかつての持ち主を示す蔵書印、表紙の素材なども、本の移動や伝流の痕跡として存在しており、これらは書誌学的に重要な研究対象となっている。

近年、アルベルト・マングウェルの読書に関する世界文化史的な研究²⁾や、あるいはこれは研究書ではないが、テキストを読む「デバイス」について論じたウンベルト・エーコとジャンクロード・カリエールの対談³⁾のように、二〇〇〇年代以降の激変する情報環境の中で「文学テキスト」と「読者」の間にある様々な諸力の関係性が問いなおされている。こうした潮流は文学に留まらない。作者と読者（聴衆・視聴者等）との間にある様々なメディアやデバイス、そして文化の伝流が作品それ自体に大きな影響を与えていることは、文学研究のみならず、様々な文化研究の立場から無視できない現象として注目されている。

音楽ではクリストファー・スモールの「ミュージッキング (musicking)」概念のように、音楽を一つの行為として捉え、演奏者と聴衆だけではなくホルのスタッフまでも「音楽行為」に携わるものとして

捉える視点が共有されるようになったし、演劇学では、スタッフから観衆にいたるまで、ある時刻に同じ場所での出来事を共有するという「同意」の群として演劇を理解するクリスティアン・ビエ、クリストフ・トリオーの視座も、演劇の作品性やテキストへのみ着目してきたことへの反省を迫るものだろう。私もまたこう考えてみたい。文学は行為の連続体である。著作の生成、他者による編集、書写者たちの改編、所蔵者たちの蔵書印……。古典籍の生成と伝流とはこれらの「文学行為」のリストであり、行為そのものである。現代の多元化する文化環境の中で、書物の歴史的な変容がどのように、また何によって生起しているのかの解明は、古典文学研究に最も期待されている領域である。

本書はこうした前提に立つて、伝本研究や諸本研究の成果を頼りに、古典籍の生成・流通・受容の過程で起こる諸現象を解明し、その諸相を明らかにしようとするものである。諸本の変容や書写面の変化は無作為に起こる物ではなく、先行する様々なテキストの影響を受けたり、あるいは先行する親本や別の伝本の影響を受けながら変化する。その有様を捉えようとする試みである。

しかしながら、そう見たとき、本書には矛盾する二つの観点が併存しているように思われるかもしれない。

一つは著述がどのような意図によって生み出されたのかを明らかにしようとする視点。もう一つは、それらの著述が書写者たちの創意工夫によってどのような変容を蒙り、変化したのかという観点である。この二つは本書の各論文において不可分に、あるいは混同して表出するように読めるかもしれない。前者は著作の成立当時の形態や状況を再現しようとする試みであり、伝統的な書誌文献学や作家論に連なる方法である。後者は作品の受容や再生産にまつわる諸現象の解明を目的とするように思われるだろう。

むろんこの両者は相互排他的な立場ではないが、本の成立を重視するか、受容を重視するかのどっちつかずな態度に受け取られてしまうかもしれない。しかし、本書が目指すのは「原態」を求める態度とも、作品の「受容」を重視する態度とも少しく異なる観点である。

諸本の変容は、共時的な社会の様相や書写者の都合だけによって引き起こされるものではなく、それぞれの著述が持つている様々な性質に添った形で、特定の方向へと変容している。

その方向性を決定づける要素は一つではない。本書でそれを応用可能な文化理論として提示することはない。しかし、もつとも単純な図式として考えた場合、「作者の意図」や「著述の性質」はこうした書写面の変容のあり方を、ある程度規定する要素であると考えられることは不当なことではないだろう。物語・随筆・歌集・撰集といった古典文学における〈ジャンル〉が、それぞれにある程度定まったテキストの書写形式を持つことはよく知られている。〈ジャンル〉ごとの書式は、作風や内容、書写態度や各時代の読者の読まれ方により、ある一定の規範を継承している。それは特に和歌の書式において顕著である。⁽⁶⁾

最初に著者が書いた書物がどのような規範を意識して書かれていたのかに注目することは「作者の意図」がどう受け継がれていったのかを説明することであると同時に、「意図」が孤立的なものではなく、前時代、あるいは同時代における作品群の影響をどのように受けて形成されたのかを理解することに通じる。これはもちろん、著者の意図を至上のものとして、その書物の原態や作者の精神に迫ることを目的とするものではない。作者の意図と著述の性質を、後代の諸伝本の書式や内容における変容を引き起こす変動的な要素として捉え直す試みである。書写者たちによる書物の変容がどのように引き起こされ

るのかを理解するために、「作者」を「原本」と「原態」の創始者という起点として、そこから諸本全体の変容を見渡していくツールとして捉える。

このような観点から院政期の歌字書を対象に議論を展開していくことで、従来の文学研究では十分に論じられなかった伝本間の関係性を再検討することができる。

院政期には、様々な目的にあわせた大量の歌字書が書かれ、貴顕への奏上や説の対立をめぐって歌学者たちが激しい論戦を戦わせることになった。そうした状況下で制作された院政期の歌字書群のうち、本書で中心にとりあげる六条藤家の家員、特に藤原清輔と顕昭の著作は、鎌倉期写本を含む多数の伝本に恵まれている。清輔の著作に関する研究は、西下経一⁽⁷⁾、久曾神昇⁽⁸⁾、川上新一郎等⁽⁹⁾の先学によって主に文献研究の立場から論じられてきた。川上がつとに指摘するように、清輔は自著の部分を論文集のようにブロックごとに整理しており、しばしば他の著述に転用している。しかし、そうした転用が認められるにもかかわらず、同じ性質をもった別の著述を再生産することはほとんどなかった。

例えば『袋草紙』下巻の末尾が発見されたことにより、その大半は『和歌一字抄』下巻末尾の「証歌」部を転用していることが明らかになった。⁽¹⁰⁾しかし、内容上の構成は大きく異なり『袋草紙』は上下巻合わせても『和歌一字抄』と同様の性質をもった著述だと読むことはできない。あくまでも記述の重出は転用の範囲を免れないのである。これは『奥義抄』の「所名」と『和歌初学抄』の「万葉集所名」など、他の事例でも同じである。清輔の著述においては、ある部分が転用（ないし共用）がなされているも、それぞれに異なるコンセプトによって編集されており、その利用方法や、対読者意識は異なっている。このコンセプトの相違は、内容面のみならず、目次や標目の立て方といった構造面の相違を形成する。

そこに清輔著作の特徴がある。だが、同時に清輔の著作は伝本間でかなりの相違が見られる。それらは著者自身による改訂の場合もあれば、書写者による恣意的な変更の場合もある。前者については川上が清輔本『古今集』を事例に詳細に検討しているが⁽⁶⁾、後者についてはまだ十分な検討がなされているとは言いがたい。

清輔がどのような形で著書を構想し、制作したのか。それを書写者がどのように変容させたのか。この二点は密接に結びついており、前者や後者に焦点をしばって論じる場合でも双方をみる必要がある。

また、本書の扱う範囲の歌学書を考える上で、院政期の歌学書を取り巻く文化環境を捉える必要がある。顕昭や清輔によって編まれた六条藤家の諸歌学書、そして勅撰集の証本や、多数の和歌資料の書写といった歌道家としての営為は、院政期特有の政治・文化的状況を背景とする和歌のあり方を強く反映している。歌道家としてのアイデンティティを自覚し、貴顕に対して和歌の師として振舞う清輔や顕昭の社会的な振舞と、それに伴う様々な読者を想定した歌学書の制作は表裏一体の関係にある。そうした院政期特有の、撰関期とは異なる和歌と連歌の位相についても論じている。

だが、先に述べたように本書は清輔・顕昭らの実像を明らかにすることを目的としてはいない。未流伝本まで含めた歌学書を見ることで、誤解を招く表現かもしれないが、書写もまた著述の執筆と同じように創造的な文学行為であることを示したい。

この問題意識は動態文化論的な視点から古典籍を捉え直す本書前半の試みに結実している。動態文化論とは、従来の書物や絵画といった静的（と見なされていたもの）に対して、映画やパフォーマンス

ツといった従来の人文学的な枠組みからはみ出る「運動」を捉え直す試みだ、とひとまずまとめておきたい。古典籍もまた書物ではあるが、それは静的なものとしてだけでなく、動的に変容している部分に着目することで、書物をその生成だけではなく伝流や変容を含めた一具の「動態」として捉える視座を提示したい。原態の復元のみを目指す書誌学や、善本の認定のみを最大の課題とする文献学的研究を否定するのではなく、それらとは異なる古典籍の、ひいては古典文化のとらえ方があることを提示するものである。このような発想は外山滋比古が提起した「異本」概念⁽⁷⁾や、書物と人との関わりを論じる書物論・読者論⁽⁸⁾とも接するものである。

本書は四部構成をとり、諸本論、六条藤家の歌人・歌書論、院政期文化論、そして「索引」についての論からなる。一見これらは様々な主題の論考が関連なく並んでいるように見えるかもしれないが、上記のような問題意識に貫かれ、様々な角度から諸本の生成から受容・その再生産までを、その時代的背景を押さえながら論じたものである。第四部は院政期に関わる論ではないが、「読者」と作品との関わり方の展開を論じたもので、その問題意識は一貫したものである。

「第一部 動態としての諸本論」は、歌学書の変容について概論・各論的に論じた四本の論考で構成される。ここでいう「動態」という言葉は先に説明したとおり、生成から受容までを一貫したプロセスとして捉えることを示している。従って、もつとも概論的である「第一章 通読する歌学書、検索する歌学書」を巻頭とした。「検索性」というキーワードを用いて、書写面の変容に合理的な要素を認め、従来「後人のさかしら」として退けられてきた書写者の意図と、それらの意図を誘発する諸本利用の諸相を論じている。「第二章 大東急記念文庫本『奥義抄』上巻の情報構造——歌学書の割付を中心に

——、「第三章 『奥義抄』 諸本の書写形態——散文的項目を中心に——」、「第四章 『和歌初学抄』の書面遷移——項目配置と享受——」の三章は、この問題意識のもとで『奥義抄』と『和歌初学抄』を分析したものである。

「第二章 院政期における歌学の展開」では、特に清輔の著述に特徴的な性質を論じた。「第一章 『和歌初学抄』の構想——修辭項目を中心に——」では、従来、詠作手引き書と言われてきた『和歌初学抄』をあらためて利用の観点から問い直し、喻来物の項目を検討することで実作に焦点を当てた清輔歌学の再考をせまった。「第二章 『和歌初学抄』所名注記の検討——歌枕と修辭技法——」では、『和歌初学抄』の歌枕書的な部分である所名の注記を分析することで、清輔が詠作を教えるために歌語の連辭に関心を寄せていることを示し、歌枕を適切に利用するための方法を清輔がどのように提示しているかを論じた。「第三章 歌学としての誹諧歌」では、誹諧歌の展開と歴史を概観し、それが各種の分類説を引き受けながら増加していく様相を論じた。「第四章 藤原清輔著述の作者名表記——無名と読人しらずの使い分けを中心に——」、「第五章 『和歌一字抄の注記』をめぐって——内閣文庫本を中心に——」では、『和歌一字抄』の諸本と、ここに見られる注記の特質について触れた。

「第三章 院政期の諸文化と歌学」では、清輔の兄である顕方と、弟である重家について論じた。顕方は同母、重家は異母兄弟であるが、諸書を読む限り重家とは仲も悪くなかったらしい。顕方との関係は不明な点も多いのであるが、『続詞花集』に一〇首が取られ、歌人としての厚遇が見て取れる。「第一章 藤原顕方——六条家歌人の一側面——」は顕方の伝記をまとめ、清輔と同じく父祖から和歌の薫陶を受けていたが、それはまだ歌学としては未分化なものであった可能性を指摘した。「第二章 『重家

集』考——守覚法親王との関わりを中心に——」では、重家の家集である『重家集』の注記及び献上先の問題を考えた。次に、院政期に花開く諸文化がどのような形で和歌に流入しているのかについての論考を収めた。「第三章 『今鏡』における源有仁家の描き方——鎖連歌記事とその情報源——」では、院政期の短連歌と鎖連歌の連続性に着目し、最初に鎖連歌が行われた有仁家の様子を記した『今鏡』について論じた。「第四章 和歌の師弟関係の成立——平安末期における芸能と和歌の地位——」では、それまでに見られなかった和歌の師弟関係が十二世紀に成立していく背景をまとめた。

「第四部 古典文化を検索する」では、様々な歌書や文学作品がカノン化（聖典化）し、用例や事例を調べるために工夫されるようになった時代の「抄出」及び「検索」のあり方を知ることができる著述についての論を収めた。「第一章 清原宣賢 『詞源略注』『詞源要略』から見る顕昭『後撰集注』の逸文」では、室町時代の学者であった清原宣賢の和歌に関する二書、『詞源略注』と『詞源要略』から、散逸した顕昭『後撰集注』の断片を集積した。ここから宣賢の利用は抄出であることが判明した。「第二章 宮内庁書陵部蔵『類標』をめぐって——近世における索引の登場とその思想——」では、宮内庁書陵部に所蔵される大部の辞書・巻丁索引類叢書である『類標』を網羅的な調査のもとで紹介し、奥書・序跋の部分的な翻刻と、全体を概観した組織図を附録として付けた。

なお、いくつか用語について述べておきたい。六条藤家はたんに六条家ともよばれる。同時代において「六条家」という呼称で顕季の流が呼ばれることはないのだが、顕季の邸が六条にあつて、それを受け継いだ顕輔の、和歌を家職とする流をそのように呼ぶ。ただし、かつては俊頼らを「六条源家」と呼ぶことがあり、それと区別して本書では「六条藤家」の表記を採用した。また「院政期」という表現が

本書には頻出する。院政期という時代区分は様々な問題があり、その範囲も始発から終わりまで様々な説が分かれる。ただし、本書で「院政期」という場合、便宜的におおよそ堀河院時代から後白河院時代あたりを指すことが多い。それは本書で取り扱う人物や作品がその時代のものに集中するからで、本来的には「平安末期」といった表現の方が時代区分としては適切であろう。しかし歌学書の文化的配置は、「撰閲期」と比べて「院政期」で明らかに大きな変化を被る。それは院政という、卑位の者でも貴顕に芸能によって接近し恩賞を得ることができるようになった政治形態と切り離せない。和歌の世界では、この院を文化の中心とするごく短い一〇〇年ほどの期間に、それまでとは全く異なる歌学知が花開き、新しい表現が開拓される新古今時代を用意するのである。それは、西暦で「十二世紀」前後とも呼ぶうる時代の一コマである。

注

- (1) 『下官集』書始草子事では、仮名物では漢字の摺本を模して見開きの左側から書き始める事を記している。
- (2) アルベルト・マングウエル著、原田範行訳『読書の歴史——あるいは読者の歴史 新装版』（柏書房、二〇一三↓原著一九九七）。
- (3) ウンベルト・エーコ、ジャン・クロード・カリエール著、工藤妙子訳『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』（阪急コミュニケーションズ、二〇一〇↓原著二〇〇九）。
- (4) クリストファー・スモール著、野澤豊一、西島千尋訳『ミュージッキング 音楽は〈行為〉である』（水声社、二〇一〇↓原著一九九八）。

- (5) クリステイアン・ビエ、クリストフ・トリオー著、佐伯隆幸日本語版監修『演劇学の教科書』（国書刊行会、二〇〇九↓原著二〇〇六）。
- (6) 例えば和歌の書式。歌集では詞書は和歌より字下げになり、物語などの散文では字が上がる。田村悦子「散文（物語、草子類）中における和歌の書式について」（『美術研究』三一七、東京国立文化財研究所、一九八一・七）。
- (7) 西下経一『古今集の伝本の研究』（明治書院、一九五四）。
- (8) 久曾神昇『古今和歌集成立論 研究篇』（風間書房、一九六一）。『日本歌学大系』には「奥義抄」〔袋草紙〕「和歌初学抄」〔和歌一字抄〕などの清輔歌学書の本文・解題が収められている。
- (9) 川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九）。
- (10) 川上注9前掲書。
- (11) 川上注9前掲書。
- (12) 外山滋比古『異本論』（みすず書房、一九七八）。後に同『外山滋比古著作集 3・異本と古典』（みすず書房、二〇〇三）に収録される。外山は「異本」を言語的な受容のバリエーションの変化にも使っており、いわゆる書誌学で使われる「流布本」に対する「異本」という概念とは異なる文学理論として利用している。
- (13) たとえば、ロジェ・シャルチエ著、長谷川輝夫訳『書物の秩序』（筑摩書房、一九九六）で示されたような書物の形態が内容的な改編を誘導するといった議論を念頭に置いている。